C.P. 出題編

ほペ8

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃ．Ｐ．　出題編

【Ｎコード】
Ｎ７９４６Ｌ

【作者名】
ほぺ８

【あらすじ】
雨の中、狂ってしまった男は泣いていた・・・
・・・沙那は協力した。
謎は読み解けるか、読者は？

（前書き）

前回、ちょっとした気の迷いで出してしまった『途中書き文』
これはいわゆる完成版。

ただし、出題。

つまり、内容考察用に前後で分けました。
でも、後の方は文字が少ないと思うので
『出題編』と『解答編』で分ける事にしました。

多分、この小説は直しが入る可能性があると思いますので
Ｖｅｒ１．００
と表記しておきましょう。

肝心の内容は多分表現不足、内容不足だと思います。
作者は長い分は苦手なので短くしました。
それでも言い方はどうかよろしくお願いします。
あと、あらすじにそこまで意味はありません・・・多分。

前置きが長くなってしまいました。
では、本編に入ります。

—ざぁ、ざぁ、ぽっちゃ、ぽっちゃ、ぴとっ、ぴとっ、

『殺す』

頭の中に浮かんでいる二つのイメージ。
最初のイメージは雨。
もう一つは唐突だった。ただ人とすれ違っただけで、頭の中に浮かぶイメージ。赤の他人に対して何でそんな気持ちになるのか分からない。

『殺す』

どんなに気を紛らわせても消すことが出来ない。嫌になった。どうしてこんな感情を、どうして人を殺そうなんて思うんだ。「死にたい」

死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。
死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。
死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。
死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。
死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。シニタイ。
シニタイ。シニタイ。シニタイ。シニタイ。シニタイ。シニタイ。
シニタイ。シニタイ。シニタイ。シニタイ。シニタイ。シニタイ。
シニタイ。シニタイ。シニタイ。シニタイ。シニタイ。シニタイ。
シニタイ。シニタイ。

もう、その言葉が言葉のように感じなくなるまで頭の中で言い続

けた。嫌だ。シニタイ。殺して。誰か。殺して。殺して。俺はもうシニタイ・・・

救ってくれよ。神様。どうしようもないこの俺を救ってくれよ。

※序章「シニタイ」終了

第二部　戦いの前の・・・

「さあ、乗り込むよ」

俺の前には十二歳ぐらいの少女がいる。

「これで終わるんだよな」

「うん、そうだよ。これで全部ＯＫ、解決」

少女は大して構えてはおらず、言わば自然体のような感じで目の前のビルを見つめている。

「でも、真正面からでいいのか？流石に本拠地に乗り込むのにこれはないと思うが」

「何をいってるの？悪いのは向こうだよ。こっちが堂々としないでどうするの。こそこそ入ったらこっちが悪そうじゃん」

「いや、でもな。確実な方法をとった方がいいと思うぞ」

「確実？何を言ってるの。私がいれば何でも確実になるよ」

「なんて自信・・・」

俺は呆れる。なんて自信家、いや自尊心が強すぎるだけか？

「私だからね」

「自惚れ過ぎだ」

俺の目の前の少女は笑う。

こいつ名は、紗那と言うらしい。「らしい」というのは、こいつの正体は俺の中ではっきりしていないからだ。素性について聞こうとすると、いつも煙に巻かれる。でも、こいつは何だかだと信頼できる奴だったりする。こいつが言った通り、何でも確実にする。そ

う、俺の望みを叶えるために色々準備してくれた。まだ、出会って一ヶ月ほどだが十分信頼に足る奴だと思っている。まあ、言動におかしい所はあるが・・・

「まあ、冗談はどっかに置いといて。作戦はこんな感じだよ」

そんな信頼のおける少女はそんな事を言って、一枚の紙を渡してきた。それを見ると、

私に着いて来い。

とだけ書いてあった。

「どう？なかなかの作戦でしょ」

一瞬にして信頼が砕け散ろうとしていた。

「当たって・・・砕けろって事か？」

「違うよ。言葉の通り、そのままの事だけど」

「これは作戦じゃない。絶対違う」

「んっとね・・・、互いの信頼感が結果を生む作戦程度で認識すればいいんじゃないカナ？」

なんだっそら、意味ワカラン。

「この瞬間俺は信頼感を失って、失望感を味わったよ」

「語呂がいいね♪」

「賞賛ありがとう・・・じゃなくて、ちゃんとした説明をしろよ！」

そんな俺の反応に対し少女はむむ、という感じのしかめっ面でこっちを見ながら言う。

「本当にこれが作戦なんだけど・・・」

マジかよ・・・

第三部　侵入

「それじゃあ、入りますか」
沙那はそんな事を言う。
「どうやって入るんだ？」
「それはね・・・」
と言って、ポケットから何かを出す。
「このカードが有ればね良いんだよ」
・・・ＩＤカード？何でそんなもん持ってんの？
「なるほどな、それなら真正面から入れるな」
「うん、これなら大丈夫。でも・・・」
少し間を開けた後、沙那はキリッとして言う。
「少し間を開けて入るべきだよ」
「その心は？」
「それは簡単なことだよ。怪しまれないようにしないとね。私みたいのと君みたいのが一緒にいると注目されるでしょ」
ちょっとだけ頷く素振りをする。
「まあ、解らなくもない」
考えてみれば解る通り、傍から見ると、少女とロリコン青年なのかな・・・。それはご勘弁。
「というわけで行ってくるよ。ちなみに入るタイミングは連絡するから」
「分かった。取り敢えず頑張れよ」
色々とな・・・

～十分後～

「門前払いされた・・・」
「アホか？お前は」
流石は一流企業のセキュリティー・・・じゃなくて、当たり前だ。こんな子供をセキュリティーエリアに安々と入れる企業はまず無い。もし真正面から入れたら、こんな会社に務めていた俺は恥ずかしく

て死にそうだ。
「もうさあ、ＩＤカード見せたらね。『はいはい、お父さんのカードを勝手に持ち出したらダメだよ。お嬢ちゃん』なんて言うんだよ！警備員の分際で」
警備員は仕事をしただけです。あと、その警備員は定型文的なことを言うなあ。
「酷いよね。全く相手にしてくれないんだよ、子供扱いしてさぁ。まったく、私はレディーだよ」
お前もホント定型文的だなぁ・・・。
そんなバカバカしいやり取りを十五分ほどする。

第四部　侵入？

結局、裏から入った。
「やっぱり、こっちからだよね」
そりゃそうだろ。そんな事より、今俺は清掃員の格好をしている。なんて典型的な侵入・・・
「そんな事より、どこから手に入れたんだよこの服」
「う～ん、とね。そこに居た清掃員のおじさんから・・・」
「嘘つけ」
「うん、よく分かったね。ちなみにちゃんとした手順を踏んで手に入れたから」
そうか、と言い。無理やり納得したような振りをしたが、どうしても納得出来ないことがある・・・
何で、お前は『清掃用具カート』に入ってるの？
沙那は体操座りをしている。思いのほか体が小さいためか、スッポリ入る上に掃除道具まで入れることの出来るスペースもある。その様子はまさに『乳母車に乗ってしまった少女』―表現力が浅はかなり・・・駄目だなこれ。
「早く押してよ」

と、言ってくる。もちろん『わー、かわいい。このままお持ち帰りぃー』みたいな気持ちには全然ならん。俺は何だか馬鹿しく思ってしまう。ちなみに沙那に『清掃用具カート』の話をしてはならんスルー、突っ込んだら負けだ。

「分かった。移動手段はエレベーターか？」

「ＯＫ、計画通りでよろしい。実に典型的でいいね」

自覚してたのか・・・

沙那が中に完全に隠れてから俺はカートを押して、従業員専用の階にあるエレベータの前まで来る。そして、上の階行きボタンを人差し指で押す。

「ねえ、話しない？」

沙那がいきなり話してきた。俺は一瞬ヒヤッとして慌てて周りを見回す。良かった誰もいない。

「馬鹿か！誰かに聞かれたらどうするんだ」

「大丈夫、この時間帯の人の流れは把握してるから」

「嘘だろ」

「いや、これはホント」

嘘つけ、と言いたいが多分本当なんだろうな。そんな事より何で話しかけてきたんだ？

「ちなみに待ってる時間が退屈だからだよ」

先読みすんなよ。俺は質問を仕掛けるのを阻害されて少し御冠だ。イライラではなく、イリャイリャ（炒りゃ炒りゃ）と言うような感じだ。分かりやすく言うと、心を炒られた気分。

「暇つぶしに何の話するの」

「お前がお題考えるんじゃないのか、普通」

「面白そうな話題ないんだもん。ねね、良いでしょ」

「お、エレベーターの到着だ」

もちろん無視。お題を考えるのが面倒だから無視をした、だけが理由ではない。俺はこの計画を失敗にしたくないからだ。大抵、も

ちろんこの一流企業なら当然だがエレベーターには監視カメラ付いている。一応対応としてカートの方は上にカバーを被せているから沙那に関しては大丈夫だが、俺が誰もいないはずなのに会話をしてる所を見られるとまずい。もし、俺がそんな素振りをしなくてもマイクが付いている可能性もある。

そんな事を自然に察知したのか、さっきまでカートの中でじたばたしていた沙那が急に大人しくなった。

もしかして、ＫＹ（空気読める子）？

馬鹿か俺は。

エレベーターは退屈だ。この会社よく人の行き来がある。そのためか、最上階まで時間がかかる。そんな退屈な俺は過去の事を思い起こす。

第五部　過去話１　閑話休題＋α

「ねえ、協力してあげようか」

雨の中、俺が初めて聞いたそいつの声だった。

「なんで、胡散臭そうな。お前を信じなきゃいかんのだ」

俺は強く言った。ちなみにここはファーストフードショップの店内。俺は何故か中学生ぐらいの女の子と席を一緒にしている。女の子はむーっとわざとらしく顔をむくれてから、一言いう。

「こんなかわいい女の子に向かって『胡散臭い』とは何かな」

「その『こんなかわいい女の子』がまさに胡散臭いんだが・・・」

「うっ・・・」

自覚したか、このうぬぼれ屋め。俺はしてやったりみたいな顔をする。

「こんな性悪一生・・・結婚いや、彼女出来ませんよ」

ヒュン―・・・ぐさっ。俺の心に言葉のナイフが刺さった。これ

は痛い、かなりイタイ。
「ちょっと、言い過ぎじゃないか」
「年齢イコール彼女いない歴が何を言う」
・・・ナイフでえぐられた。痛いを通り越して痛みを感じれない。あのな、本当に深刻な悩みなんだよ、頼むからこれ以上豆腐ハートを傷つけないでくれよ・・・っと言えない俺がいたりする。プライドが自衛本能を抑止する。なんて事だ！
そんな俺の頭の中の活動を無視して話を始める少女。
「まあ、与太話はこれまでにして、いい感じに場が暖まったから本題に戻ろうかな」
閑話休題か？違う、断じて違う。さっきの話は無視できん。俺にとっては本編だぞその話題。
少女は変な方向に暖まった俺をやはり無視して話をする。
「正確には協力するから、協力して欲しいんだよ」

「どういう意味だ・・・」

俺は声のトーンを下げる。俺にはコイツの言っている意味を大体理解出来るような気がする。いや、俺が勤めている会社の事絡みだと思う。
「大体、私が聞きたいことは分かるでしょ」
「何のことだ？」
だが、俺はあえて言わない。もしかしたら、何か引っ掛けるために言った可能性も考えられる。俺はそこまで会社に従順ではないが一応社会人としてのプライドが有る。会社の事を安々と漏らすことは出来ない。
少女は俺が答えるつもりが無いのと、敵視している事を認識すると、
「そうだね、こっちも腹を割って話さないといけないよね」
と、言う。

「簡単にいえばあなたの会社、いや一週間ほど前にあなたの会社の機械で起こった転送事故の事だよ」

第六部　過去話２　転送事故

事故は一週間前にあった。それは死亡事故だった。不慮の事故・・・というわけではない。そして、この事故は社会的な問題にはなっていない。なぜなら、死んだのは『殺人犯』だったのも理由の一つだろう。

アメリカのある場所で殺人事件が起こった。一家殺害と言うある意味メジャーだが内容はとてもマイナーと言えるものだった。その一家のほとんどは、あえて言うなら『惨殺死体』になっていた。一家の構成は老人二人、大人二人、子供三人で畜産を営んでいたという平々凡々な家庭だった。でも、一週間で変わってしまった。家族は七人、一日に一人ずつ殺したらしい、家族の目の前で。殺しのサイクルは最初は焼印を使って体中に印を刻む。その後には、アメリカの細長い刺の筋切りでバンバン肉を叩き、鋸で肢体を切り分けては本人の前でミンチにする。そして、五体不満足になった体は挽き肉のような物になる。

七日目に警察が来た。しかし、その時には体中に焼印をされて悶えていたおじいさんと挽き肉のような物しかいなかった。犯人は警察に気づき逃げたらしい。

その後、事故が起こった。最初の殺人も含め『ＣＴ事件』とも言われていて、人間の精神を転送して、転送先にある肉体にインプットする装置が事件を解決したようなものだった。

犯人はとある企業の研究施設に逃げ込んだ。その企業は『ＣＴ』と言われる装置、正確にはそのための環境を作り上げた企業だった。

ここに篭城した犯人は幸いにも研究員には手を出すことは無かった。ただ、実験中だった装置で逃げようとした。犯人は『CT』という物をよく理解していなかった。いや、分かっていながらも少しの望みに掛けてみたのかはたまた、警察に捕まりたくないというプライドがそうさせた可能性もある。『転送先に”肉体“が無ければ死んでしまう。その上装置の調整も済んでいないどこに飛ぶのか分からいないぞ』研究員はそう訴えたのだが、脅されてやむなく実行したらしい。その結果、死んだ。正確には『転送元の体が転送後すぐ死んだ』らしい。

そうして、この事件は幕を閉じた。

第七部　過去話3

あの事件の内容を瞬時に思い起こす。

「もしかして、関係者か？」

俺はあえて曖昧な質問をした質問した。これでだいぶ篩にかけられる。

「いいえ、ハッキリ言えば他人事だよ」

・・・他人事？つまり、復讐心その他もろもろの私情では無いのか。俺は考えるこの少女は何が目的なのか。

「じゃあ、何が目的だ」

「それを今から話そうと思ってるところだよ」

なんだ、こいつは何を話そうとするんだ。俺はこの会話で優位に立てるように先読みをする。

少女は口を開けて、言葉を発する。

それは緊張の一瞬―

「なんで『犯人』は死んだの？」

・・・・・・はい？

「何を・・・言って・・・るん・・・だ？」

俺は理解ができなかった。そんな簡単な疑問、いくら馬鹿な奴でも分かる。精神が肉体に結びついていなければ体は調節する機能がうまく働かなくなりバランスを崩して死んでしまうのだ！

そんな事を聞かれた俺は頭を掻き毟りたいほどイライラしてきた。見学してきた小学生が前もって調べておけば解っているはずの基礎知識をわざわざ聞かれているような気分だ。—台無しだ、と俺はそう思う。こいつは見た目通りのただの少女。あの雨の中狂っていた俺を助け出したのは気まぐれ。少女それは—何か違う、そう思ったのは幻想。—なにか変われる、そう想ったは妄想。—信じられる、そう思ったのは夢物語。

何か・・・崩れる。平穏。何か・・・壊れる。良心。何か・・・無くなる。俺の心。

俺は視界の端にあるストローをみた。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を・・・潰す。潰す。目を潰す。

ツブス、メヲツブス。

殺してやる。刃物で。潰してやる。椅子で。えぐってやる。指で。

むしっ

—びしゃ。

冷たい。まず感じた感覚。俺はハッとした。

「大丈夫？」

まず視界に入ってきたのは、少女の顔だった。

「何か、すごく変だったけどどうしたの？気でも狂ったの？」

俺はまず状況把握をした。顔にかかったものに手で触れ、目で確認する。透明、多分水だ。証拠に少女の手には空のコップがある。あれ、何故水を俺の顔にぶちまけたんだ？

「お、お客さんどうしたのですか」

店員が慌てている。どうやら、水をぶちまけた事を聞いているらしい。

「大丈夫です。私は連れが酔いつぶれようとしたのでちょっと目覚ましにかけてやっただけです」

と、少女が判りやすい大嘘をつく。店員は納得していないようだ。そのためかこっちにも話しかけてきた。

「あの・・・大丈夫ですか？タオルでもお持ち致しましょうか」

「あっ・・・大丈夫です。何の問題もありません」

やはりと言うか、店員は納得していないがこれ以上は野暮と判断した、または面倒くさくなると思ったのか、これ以上の質問は諦めて素直にタオルも持ってくることを選んだ。

俺は少女に質問することを選んだ。

「・・・で、なんで水かけた」

「簡単なことだよ。酔いつぶれようとしていたからだよ」

まだ言うかその大嘘。

「ここは歴としたファーストフードの店、お酒は売っておらんぞ」

「え、でも『ジンジャーエール』ってのがあるけど」

「あれはお酒じゃない。色はそれっぽいかもしれんが」

「じゃあ、ここにくる前に飲んだとか？」

「酔いつぶれそうなのに、ファーストフードを食いに来るとはなんて珍妙な話だよ」

そんな俺の対応を見て、少女が微笑む。

「よかった、元に戻って」

元に戻って・・・？どういう意味だ。

「そんな事より、早くここから去らない？」

少女はそう語りかけてきた。
「何で？」
「周りをちゃんと見ることだよ」
沙那に言われるがままに周りを見る。じー・・・。あれ、なんか視線が痛い。そういえば、ここ店の中だよな・・・。
「物凄く、恥ずかしい」
「そうかな、私的には真剣な話をするのにここは向かないって思っただけだけど」
「お前は神経が図太いのか、それとも脳天気なだけなのか・・・」
そんなこんなで、店員にタオルを貸してもらった後さっさと店を出る。去り際に見た店員の顔がなんか疲れている。こういうトラブルは初めて体験したのかもしれない。『なら、良いことをした。何事も経験が一番』とバカでアホらしい考えを瞬時に消す。
「話の腰が折れちゃったけど、もう大丈夫だよね」
沙那が話しかけてくる。俺はすぐに考えをまとめ話す順序を決める。そして、
「俺はどうなってた」
これが一番の疑問だった。

少女は小さく笑う。どうやら、笑い話程度の事らしい。
「雨の中で出会ったアナタだったよ」
―笑い事では無かった。

考察材料　ＣＴ説明

技術の進歩した今でさえ、量子テレポートは出来ない。しかし、人間は面白い事を考える。流石は『考える葦』と言うべきか。または、『枯れた技術の水平思考』という経営哲学の考えかもしれない。
ＣＴは人間の霊と言うより精神を転送する装置。しかし、それだ

けでは転送した事にならない。ちなみにだが、ココでの転送の定義は「精神」と「肉体」と「記憶」がセットになって、遠くの場所に一瞬で送れる事、又は存在することだ。

しかし、人間の体を量子化して転送する技術は残念ながら無い。だから、『生物工学』を利用した。

コピー、つまり『クローン』を使う。これによってすべての課題を解決出来る。

手順はこうだ。

まず、転送先に「肉体」を用意する。つぎに、ＣＴにセット。発信元も、オリジナルをＣＴにセットをして転送。その後には、発信元の体は意識不明なる、というよりは『意識が無くなる』状態、生物学的視点では「植物状態」になるので丁重に管理する。

この素晴らしいシステムに問題があるとしたら、管理費の高さだろう。装置自体は大したことではないが、「肉体」の管理が大変だ。このせいで、上級階級の人ぐらいしか使わない。

第八部　今

ああ、そんな事もあったと今思う。もうすぐ終わる悪夢、書いて字の如く悪い夢・・・いや、夢ではない『現実』だな。・・・夢だったらどれだけ良かったのか。この事をさらけ出すのはあまりにも酷すぎる。だけど、それでもいいのか・・・

俺は思う。大昔の哲学者が言っていた言葉を思い出す。「無知は罪」

俺は思う。実は知ることも『罪』ではないのか？何となく思う。

何となく―

「馬鹿か俺は・・・」
何思想にふけっているのか、再就職は哲学者か？まあ、悪くない。
「何？バカって」
少女が話しかけてきた。
「な・・・何で話しかけているんだ。誰かに気づかれたらどうするんだ」
俺は一応、応答をした。なるべく監視カメラから会話しているのに気付かれないよう、まるで独り言を呟くように。
「器用だね。そんな話し方初めてみた感じがするよ」
俺は沙那に対してギロッと睨む。なるべく、頭と首を動かさず。本当に、誰のおかげだか解ってるのか？こいつはやっぱりＫＹ（空気読めない子）だ！
少女は訳が分かっていないようでとぼけていたが、何か合点がいったようですぐに納得したような顔をして話しかけてくる。
「もう、最上階だよ」
え？俺は慌てて、扉の上のナンバーを見る。確かに、最上階だった。
「しまった」
この会社のエレベーターは何故か扉が二つある。前ばっかり見ていたので、後ろの扉が開いていることに気付かなかった。
俺は閉まろうとしている後ろのドアを阻止して、最上階に無事たどり着いた。
俺は息をつき、一言
「てか、最上階だから話していいというのは、おかしいと思うのだが」
と、一応突っ込んでみた。
「うん、確かに最上階に来たからって話していいとは限らないよね。ガードマンが待ち構えてるかもしれないし」
その通りだ。でも、その回答をするということはきっと問題ない

のだろう。
少女は何も言わない。そのかわりに、『カート』から降りた。
「という訳で、ここからは私も一緒に歩くことにするよ。カートは乗り心地悪いし」
「そうか、それじゃあこのカートはここにおいて・・・」
「ねぇ」
少女は呼びかけてくる。でも何か『違和感』を感じた。一応そっちの方を見ると、何故か黒々とした『拳銃』らしき物を握っている。俺は驚いて言葉が出なかった。凄く唐突で、俺の油断を狙ったような感じの行動。
「ねぇ、アナタは耐えられる？欲望に」
―いきなりの問。アナタ・・・俺は、ワカラナイ。こいつが何を聞いているのか。または、ソレに耐えられるのか。
何を言っているんだ？ワカラナイ・・・質問は質問自体を理解していないと回答はできない。だから俺は何も言えない。
少女は冷たい目をして何も答えられない俺を見ている。その目をあえて言葉にするなら、冷静な目。しかし、無機質な感じがする。冷静と言うより冷酷さがある。―コワイ？違うそんなモノではない。言葉にできない感情の目だ。
少女は俺にその銃を向ける。
銃というものは不思議だ。刃物とは違って、間接的な凶器だ。ただの黒々とした筒がこれほどまでに怖いとは思いもしなかった。いや、思ったのではない、『感じた』の方が正確だ。でも、俺は沙那を怖いとは思えなかった。不思議だ。確実にこいつは俺を殺せる。でも、怖くない。こいつを信じているからか？いや、言葉が足りない。そんなレベルではない。俺は何となく質問の意味を感じたのかもしれない。しかし、何も言えなかった。理解していないからだ。
でも、理解した。いや、感じた、違う、想った・・・だから恐れない。

こいつを『信じる』と想っているんだ俺は。だから・・・

俺は・・・怖くない。アナタも怖くない。いや、恐れる必要はない・・・俺はこいつを信じている。いや、そう想っている。でも、

「ごめんね」

あまりにも予想外の言葉だった。少女が放ったその言葉に何故か俺は震えた！つい、一歩後ろに下がってしまう・・・

そして、少女は言う。

「ありがとうね・・・って、あれ何で驚いてるの？」

「・・・は？」

え・・・え？俺を撃ってくるんじゃないの、お前。何言ってんの・・・

「もしかして、さっきの『ごめん』って言葉誤解したの？」

「誤解・・・」―そして、理解。

「あのね。私は君を裏切るような事はしないよ。絶対にね」

沈黙。言葉が出ない。いや、出すことが馬鹿らしい。

「あの・・・怒ってる？」

いらっ、その回答はどんな奴でも同じものになる。つい拳に力なんかが入ってしまう。でも、暴力は駄目だ。だから俺は怒りを言葉でぶつける事にする。

「当たり前だ！」

そして、俺の説教が始まった。

第九部　無題

説教は苦手だ。とても苦手だ。だって、沙那はまるで反省をしていない。やはり、神経が図太いのか？

「いやね～ちょっとさ、こういう事には憧れていてね」

「どんな事にだ！だいたい拳銃を何処から仕入れた」

ちなみに俺はまだカンカンだ。
「あのね、そこの交番にいたおじ」
「嘘つけ」
最後まで言わせねえぞ、そのネタ。
「ホントだよ。だいたい、私がこんな銃普通、手にいれることは出来ないよ」
「警察の銃にしては少々デカイ。てか、今までのお前の行動からお前が銃を手にいれる事は可能だと思うぞ」
「いやだなぁ～褒められると照れるよ」
いらっ、
「今からサツ呼んでムショまでドナドナしようか？」
こんな奴にはやはりお仕置きだけではなく、罰も必要だ。
「怖いこと言うね、言葉遣いが」
警察は怖くないのか、お前は大物だな本当に。
「いいじゃん、カッコよければ」
「お前から銃を奪って、撃ち殺せばよかったのか」
「その時、ドナドナされちゃうよ～」
「もし生きていたら、お前は銃刀法違反で結果的にドナドナされるかもな」
少女は「は、は、は、は」とらしくもない笑いをして、
「これはモデルガンだよ」
と答える。嘘つけ。さっき、ポケットからやっきょうが落ちていたぞ。ちなみに、今振り返ればそのやっきょうが見える。
「取り敢えず、この銃は持っておいて」
俺に銃を渡す。銃は思ったより重かった。
「何で持たせるんだ？」
俺は疑問に思う。なんで俺に持たせるんだ、威嚇するのには少女より俺みたいな大人のほうが良いからか？
そんな疑問に対して少女は顔をこっちに向けて、俺の瞳を見つめてから答える。

「君を信頼しているからだよ」

第十部　最後の間

そんなこんな、あんなどんな、事があって俺たちはうちの会社の社長との三人で社長室にいる次第だ。
「改めまして、こんにちは社長さん」
沙那はうちの会社の社長に話しかけている。
「こんな事は止めてくれないかな。うちの社員が辞めたらどうするんだ」
多分、さっきのＯＬさんに拳銃を突きつけた事だろう。可哀想にボタン押しても警察こないよ。
「そんな社員いらないでしょ。もやしっ子は花を咲かせないし、実を実らせないからね」
「でも、信頼における者たちだ。簡単には切り捨てられない」
それにしても、うちの社長さん度胸あるな。こっち拳銃持ってるのに・・・
「義理深いんだね。立派な社長さん」
「で、本題はなんなんだ」
ちょっとだけ無視された少女は「ん～」、言った後。ちょっとフザケたように言う。
「なんで、そんなに淡々としているの？」
「私は『社員第一』がモットウだからだ」
そんな事言う社長さんリアルにいるのか。感心感心。
「つまり、あなたが死んで良いというわけなんだね」
「端的に言えばそうだ」
沙那は少し困る。ちなみに困っている理由は交渉しにくいのではなく、反応に困っているだけだ。
「ねぇ、ちょっと君の会社の社長って変わってるね」
いきなり、俺のほうに話を振ってきた。まあ、色んな意味で変わ

ってるな。
「ああ、まさかこんなタイプの人間とは思わなかったな。もう少し、理に適ったことを心情にしてる人かと思ったけど」
「会社がここまで大きくなると人の心も考え方、信念も変わる。社員は家族・・・とまではいかないが、仲間や同志のような意識を持つようになる」
「ホントに立派だね、まさに理想の社長」
なんか、自分の会社を褒められるっていいな・・・じゃなくてこれは小馬鹿にされてるんだ。そんな事より本題に戻らないといけない。
「で、何かな?本題は」
―社長ＧＪ。ナイスだよ。そして、沙那が一息置いてから返事を返す。
「本題ね・・・分かった。まず、ここから話すことにするよ」
全てが終わる。少女は思う。言葉なんてもので『世界』は変わると。
少女は冷酷になる。瞳は冷たい。相手を確実に倒すために氷の様になる。
「ＣＴ事件、これが始まり・・・」
Ｃ．Ｐ．出題終了

（後書き）

謎は『解った』？

おまけコーナーもあるよ。

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８０７５ｌ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7946l/

C.P. 出題編

2011年10月7日08時17分発行